

# 小田原史談

第12号  
史談会  
小田原市丁内  
小田原市幸一館  
発行所 小田原市文化  
郷土

## 郷土の偉人

### 北海道開拓者大友亀太郎

1822  
改政5年  
から  
内田武雄

大友亀太郎氏は小田原市西大友の人で今から凡そ三十余年前即ち天保五年四月廿七日に西大友に生まれました。幼年の頃より農業や養蚕の仕事に非常に熱心でありました。

其の時既に実業に志したのであります。十五、六才の頃になりまずと家計の事等お父さんの吉備門に相談しお父さんも彼の言葉をたいへんよいことだと言つて用いた程でした。二十二才の時には村費を扱う人になりました。其頃です。彼は次のような事を考へて来しました。「人の一生

は金銀財宝を豊富にするようなことではない。もつと大きな仕事がある。即ち積善にある」と考へた役は一切の家事を弟に委せて一働しようと村を出て栃木県芳賀郡桜町に行き二宮先生

の弟子となりました。報徳の精神のもとに他日彼が一代の事業家として活躍するに至ったとは、全く此の時に始まるもといつてよいでしょう。本当に精魂をうち込んだ真剣な毎日を送りました。汗をしばり埃をあびて朝早くから夜遅くまで鋸を取り、鋸をにぎって土堤を築き池を掘り水路を開き

道路を通し野原を起し田畑を開墾したのでした。彼の好学心も亦烈しかった。仕事の寸暇に夜の眠をさいて勉学に読書に先生を初め先輩の教を受けつつ励んだのであります。

安政五年彼が二十五才になった時遂に彼は徳川十四代將軍家茂公に召しかかへられ北海道へ渡り其地を切開く役を仰せつけられました。翌安政六年愈々彼は年

も田畑と致しました。着々と開墾され、進み行く仕事を眺め異郷の自分を考へた時彼の胸中こそどんなものだったでしょう。山野に寝原野を開くうちに月日は流れて三十三才となりました。彼は幕府より、蝦夷地開墾を命ぜられました。蝦夷地とは北海道の奥のことです。いわば人跡稀な所です。彼は早速函館の奉行所へ蝦夷地全国永年開墾見込書をさしあげ、そうして蝦夷地の石狩におもむきました。

千舌斧を知らない密林、至る所草木が繁茂し、殆んど手のくたしようにありません。然し彼の生命は躍りあがったのです。確固たる信念のもとに愈々着手しました。木を伐り、草を知り道を開き用水路（大安堀とも言う）や橋をこしらへ其年の九月頃には漸く人馬も村の道路を通するようになりました。石狩の原野も彼の道には碁石に水です。かくて慶応三年四月より其原野も田畑に開墾されて七十町歩余も立派な田となり、畑となり其年の秋には初めて稲の穂が波打ち第一回の収穫を得ました、また移住民

も次第に増えるようになりました。此の部落、此の村こそ、今の札幌です。慶応四年四月此処へ妙見社を造り、これを鎮守としました。程なく世は明治の御皇政となりました。彼は命により石狩國兵省出張所開墾所となり朝臣となったのです。其の頃の話です。朝廷の開墾使が蝦夷地にやってきました。そうして彼を旅館に呼んで言うには「今のところ我々開拓使には実力のある人が居ないから是非お前に来て働いてもらいたい。若く若し養成してくれるなら、お前を重い役に用いてやりましょう」と言いました。彼は直に答へました。「私は

二宮尊徳の生誕の地に、いくつかの逸話が伝えられていた。翁の遺跡を尋ねる遠来の士はこれ聞いて、いい土産話を得たと喜んで帰郷する。ところが、豈図らんや、その根元が不明であつたり、色々と潤色されるもの誇りとして伝えら

兵部省に勤めている故貴方達と一緒に働くわけにはいきません」彼は常に自己の職務に忠実だったので。後明治四年三月青森県に勤業掛として働き、翌年島根県に転じ租税出納物産開墾掛として勤め六年山梨県に転じ勤業掛を命ぜられました。こうして明治六年全國各地に名を留め、功を残して故郷へ錦を飾りました郷土村へ歸りてからは或は水利のため学校設立のため或は報徳会掛として報徳精神のもとに大いに力を尽されました。明治卅年十二月十四日、絶大なる功績と不朽の名角を後世に残し永眠されたのであります。

古屋安定  
のが、山彦のように再び郷里に帰って、郷土の逸話として、又四方に宣伝される趣き見えれるものがあつた。これらのものは、多くは概念的なもので、人間離れがしており、しかも、いかにまことしやかに信ずるものの誇りとして伝えら

無題

古屋安定

1822  
改政5年  
から

れるのである。七十年、八十年、百年前のことが、その真相がどうも残ることなく忘れられ、消えてなくなってしまうものと、情けなく思はれることがよくあったが、それが物知りと云はれる人達の口から、いかにも真実らしく伝えら、そのために、又物知りとして尊敬されて来たのである。不思議な世界である。

今迄無視されて来た、知らないで来たことが、一つのブームに乗って、猫も杓子も一躍考古学者になったり、史実家になったりしてそうした人達の発表を見たかり聞いたりするが、いかに分化する科学の時代でも、その奥にあるものを窮うことの出来ないものであつては、そのことをおとし、又それを扱っている人柄をとおして……甚だ呆気ないものが感ぜられる。この頃流行のアイデアとしても載けない臭味さえ覚えさせられるのである。

ある知人は、ある時代、頻りに土器や石器を蒐集して歩いて、何様の箱にこれを死蔵した。或はその中に得がたい逸話があったかも知れない。けれども、そ

れを見せられる私自身あまり感興が湧かない。そのうち彼のマニヤは止んだ。山積された蒐集品も姿を消してしまった。酒代に変わったのだとも云う。

また、或る知人は、それが一つの生活ともなつて、強い感激をもつて、嘗々と古実を漁っているが、權威ある発表の力を持たぬために、切角の油揚をとんびにさらわれるように、利口な人に吸取されてしまつて、ひそかに慨嘆を繰返している。まことにあわれにも気の毒な人物であるが、と云つて相変らず止められないでいるところを見ると、それが性格的にもなつて、なお独り楽しむと云う境地を味っているのかも知れない。

文芸春秋の八月号に、ある法医学者が書いているものの中に、戦後だけでも千数百体の遺体を解剖しているそうだが、何やらぶよぶよとして柔かい物体、紫色でこりこりした品物を、マスクもつけないで、ただいじくっているにすぎない。若し、かつて生き、悩み、喜び、愛した人間として、その重みと全体を計っていたら、とてもこの仕事を計つ

ていたら、とてもこの仕事は出来ぬものだろうと述べている。なるほど、鑑定役としてスを執っている場合の心算はそうであろう。そうしてこそ、明鏡止水、適確な鑑定が下されて、彼氏の權威は益々揚ることになるのであろうが、その先生が白衣を脱いで、その日何事も

随筆あれこれ

会社乗取り騒動の巻

井上生

なかつたように、いつもの通り斜筆すると、奥さんは必ず「今日は解剖がありましたね」と云いあてるのである。妻は私の下着から敏感にその臭いを嗅ぎとると云うのである。あるいは深く肌まで浸み込んでい

るのかも知れない。それ程臭いは強いのだそうである。臭覚の鈍い私には、その臭

臭は、彼の人間にまで浸込んで発散しているのではなからうと勘ぐられるのである。昔、間男とデートして来た女房が、髪の中の浸み込んだ煙草の香で、亭主に不義を押しえられた話があるが、これも一つの部分

「今日皆さんにお集りを願つたのは実は私今日限りで会社を辞するので其の挨拶に来た。諸君が私居なくとも今後は互に力を合せてやってほしい宜敷たのむ。関係会社へは昨日挨拶を済ませて来た」とあまりにも突然でしかも簡単な程の御話である。其の挨拶が終るか終らぬ内、こんどは関根要八常任監査役(浅野総一郎氏の名代)が入室さ

天下の実業家によって創設せられた株式会社帝國ホテル新館は日本の代表的なものとされて居る。発行人は

大倉喜八郎男爵、浅野総一郎氏等の名士によつてである。今もそうである様に外国人は横浜に上陸すると必ずこのホテルに泊る。そして日本

の第一印象を心よく受けている。私は大正十年四月此のホテル新館が出来ると同時に会計係に入社する事が出来、以来九年半に渉つて御厄介

になりました。其の間中種々と面白かつた事、愉快だつた事、又困つた事等の思出を筆の動くまゝに書き綴つて見ましょ

う。早いもので入社後五年は経つた或る日「課長以上は全員社長室に集まるよ

う」と庶務課長の小河原さんが連絡して来た。「何事が起きたのだろう

か?会社不景気の万恢策の相談かしら、それとも良いニュースを大倉喜七郎社長から御話があるのかも知れない」と思い思いに各課長は考えながら社長室に集ま

る。其の小林さんが入つて来ると社長の椅子に席を取られた。そしておもむろに「今日皆さんにお集りを願つたのは実は私今日限りで会社を辞するので其の挨拶に来た。諸君が私居なくとも今後は互に力を合せてやってほしい宜敷たのむ。関係会社へは昨日挨拶を済ませて来た」とあまりにも突然でしかも簡単な程の御話である。其の挨拶が終るか終らぬ内、こんどは関根要八常任監査役(浅野総一郎氏の名代)が入室さ

差上申御請一札之事

郷土文化館調

一此度御尋之大塩平八郎外五人并大井正一郎  
外若人人相書を以被仰達之趣委細  
承知仕候右のものは拙寺に召抱置不申候処美正ニ  
御座候弥御尋御触通もの及見聞候へ、  
早速御注進可申上候若隱置協より相知候へ、  
急度曲事ニ可被仰付候右為御請一札  
差上申処如件

相州足柄上郡塚原村  
天保八丁酉年 四月 閏

天王院 義中

御三箇寺  
御役者中



宅に帰って床を取らせて寝る。

「一体どうした事なのでし  
込んで仕舞った。家内や女  
中は心配して尋ねるが一言  
も発しない。「お医者様を呼び  
ましようか？」と言う。「病  
気ではないよ寝かせて呉  
れ」  
二、三時間経った頃バット  
はね起きて床を出て夕食も  
そこそこに渋谷の小林さん  
の御宅へと向った、どうし  
ても臍に落ちないのだ。あ  
の時の二人の重役の御挨拶  
はあまりにも突然の事でも  
あったし、何かそれには意  
味がふくまれて居る様な気  
がしてならない。これはど  
うしても小林重役に会って  
真相を確かめる必要がある  
と床の中で考えての事であ  
った。

「いや君には何の関係事で  
はないよ、とうに少しでも  
話して置けばよかったがそ  
れも出来なかつたので失礼  
した。然し折角心配して尋  
ねて来てくれたのであるか  
ら君にだけへ話をしよう  
実は」と奥様も同席して次  
の様なお話し

「会計係である君は良く知  
つての通りホテルは此の廻  
赤字続きでしょう。それで  
いて六分の配当はしている

初て日頃可愛がっている小  
林御夫妻を渋谷の御自宅を  
訪問した時刻は既に夜であ  
る。

一八三七年天保八年二月十九日  
大塩平八郎大阪にて乱を起す

平八郎はもと大阪町奉行の与力として頗る治績あり後、  
致仕して家塾を開き、陽明学を講ぜしが天保の大飢饉に  
際し今や窮民の惨状を見るに忍びず、町奉行に上書して  
官の倉庫を開きこれを救恤せんことを請うも顧みられざ  
りしたため憤然起って同志を糾合し火を市中に放ち富豪を  
掠奪して貧民を救わんとせしも成らず一たび大阪を脱出  
す、此の時、人相画きと諸状を併せ地方に配布した(今  
日の指名手配)状の一である。

開始、即ちタコ配をしなけ  
ればならなかつたのである  
それは三年程前の事、前社  
長大倉喜八郎男爵の親友大  
日本ビル会社社長である  
馬越恭平氏に御願いしてホ  
テルの株を相当数持って貰  
った。其の時の約束は将来  
必ず毎期六分の配当をする  
からと言う事であった。処  
が此処両三年不調になって  
配当処か、先般君からも意  
見が出た様に経理面が極度  
に行きつまつた。そしてホ  
テルの重役関係の三井銀行  
にしる大倉銀行、若尾銀行  
それから第一銀行でも担保  
なくては借入れが出来ない  
はめになって仕舞った。ホ  
テルは現在二重三重の担保  
に入っているだろう。そん  
な訳で此の期からは当分無  
配をしなければならぬ。  
それで今の社長である大倉  
喜七郎氏が重役会に報告し  
た。

すると同席の馬越重役が憤  
然と起って「社長！それは  
いかんそれは話が違ふ、僕  
は君の親父から頼まれて株  
を持たされたしかも必ず六  
分の配当をするからと言う  
約束のもとに！しかるに此  
の期から無配とは何事だ、  
それなら僕の株を今直ぐ引

き取って貰いましょう」

「それは一寸困りましたね  
実は大倉組は御承知の通り  
目下盛んに全力を尽して満  
洲方面に投資をして居りま  
すので内地には最早や其の  
余猶がないのです」  
「そうですか、それでは仕  
方ないそれならどうですか  
貴君は社長を辞め給へ、後  
は僕が引受けましょう。そ  
して小林常務、関根常任、  
若尾幾太郎取締役(代議士)  
それに若尾倫監査役(若尾  
銀行重役)の重役達も責任  
を取って貰いましょう。そ  
の上支配人の犬丸徹三氏  
も」と言う難題をふきかけ  
られた。困った！大倉社長  
は一言もない。

印刷物は  
弘英印刷へ

小田原市井細田八一  
電話四、一〇八番

第十二号

昭和三十七年七月十五日発行  
(毎月一回発行)  
会費 一ヶ年三百六十円  
発行人 小田原史談会  
編集人 機関紙編集部  
編集所 小田原市幸一丁目  
郷土文化館内  
小田原史談会

昭和三十七年七月十五日発行  
(毎月一回発行)  
会費 一ヶ年三百六十円  
発行人 小田原史談会  
編集人 機関紙編集部  
編集所 小田原市幸一丁目  
郷土文化館内  
小田原史談会

昭和三十七年七月十五日発行  
(毎月一回発行)  
会費 一ヶ年三百六十円  
発行人 小田原史談会  
編集人 機関紙編集部  
編集所 小田原市幸一丁目  
郷土文化館内  
小田原史談会

昭和三十七年七月十五日発行  
(毎月一回発行)  
会費 一ヶ年三百六十円  
発行人 小田原史談会  
編集人 機関紙編集部  
編集所 小田原市幸一丁目  
郷土文化館内  
小田原史談会

<p>御料理仕出し 御弁当</p> <p><b>株式会社 東華軒</b></p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>純良医薬品</p> <p>株式会社 <b>オダワラ薬局</b></p> <p>錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしやれ彩華</p> <p><b>松屋</b></p> <p>小田原錦通り 電話三三三六</p>	<p>銘菓 松 銘菓 千代 銘菓 甘露梅 銘菓 (県指定の店)</p> <p>電話 2376</p> <p><b>集栄堂本店</b></p>
--	---	---	--

<p>平野商会</p> <p><b>平野久雄</b></p> <p>小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真</p> <p><b>イガラシ</b></p> <p>小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器</p> <p><b>江島屋</b></p> <p>小田原箱根口 電話6602</p>	<p><b>志澤</b></p> <p>TEL3131</p>
---	---	---	---------------------------------

<p>株式会社</p> <p><b>小田原百貨店</b></p> <p>社長 神戸英次郎</p>	<p>明るい生活 楽しい読書</p> <p><b>八小堂</b></p> <p>小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社</p> <p>太陽自動車 株式会社</p> <p>代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社</p> <p><b>大雄山線</b></p> <p>運営事務所</p>
--	---	---	---

<p>あなたの洋品店</p> <p><b>はふや</b></p> <p>小田原幸町 TEL2307</p>	<p><b>小田原信用金庫</b></p>	<p><b>きそば庵</b></p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p><b>松坂屋製菓本舗</b></p> <p>小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	-----------------------	---	--

<p>高級陶器の店</p> <p>小田原市緑1~103 小田原銀座通り</p> <p>株式会社<b>江島屋陶舗</b></p> <p>TEL(0465)5427</p>	<p>梅衣 露の月</p> <p>小田原駅前</p> <p><b>正栄堂菓子舗</b></p> <p>電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店</p> <p><b>花田屋</b></p> <p>小田原銀座2 電話3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う</p> <p><b>カメラの光輝堂</b></p> <p>小田原駅前 TEL5965 4859</p>
--	---	---	--

<p>プラスチック 成型加工</p> <p><b>東海化成株式会社</b></p> <p>取締役社長 滝本友信</p> <p>電話小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン、パピリオドル、マ ナー、キャロン婦人靴下代理店</p> <p>有限会社<b>山一商店</b></p> <p>小田原市井細田428 電話 3553</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社<b>星崎仲吉商店</b></p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋</p> <p><b>茶利商店</b></p> <p>小田原市多古25 電話2341・2374</p>
---	---	--	---